

女子大生のLINE利用時の行動及び孤独感が 友人関係に及ぼす影響について

Effects of using LINE application behavior and loneliness on
friendships among female university students

平木 蒼佳

跡見学園女子大学大学院
人文科学研究科臨床心理学専攻

Souka Hiraki

Division of Clinical Psychology,
Graduate School of Humanities, Atomi University

宮崎 圭子

跡見学園女子大学心理学部

Keiko Miyazaki

Atomi University

要 旨

本研究は、女子大学生において、LINE利用時の行動及び孤独感が、友人関係に及ぼす影響について検討することを目的とした。女子大学生164名を調査対象者とし、質問紙調査を行った。質問紙は「LINE利用時の行動尺度」「改訂UCLA孤独感尺度」「友人関係尺度」で構成された。「LINE利用時の行動尺度」は、第1因子「一般的積極利用」、第2因子「自己アピール」、第3因子「敏感即応」、第4因子「スルースキル」、第5因子「表現法配慮」の5つの下位尺度から構成されている。「友人関係尺度」は、第1因子「表面的-内面的関係」、第2因子「群れ」、第3因子「気遣い」の3つの下位尺度から構成されている。改訂UCLA孤独感尺度は単一次元尺度であることが諸井（1991）で示されている。独立変数をLINE利用時の行動尺度の下位尺度及び孤独感尺度、従属変数を友人関係尺度の下位尺度とし、それぞれ重回帰分析を行った。その結果、孤独感が友人関係に0.1%水準で有意に負の影響を与えていることが明らかとなった。LINE利用時の行動において、おおよそ有意な結果は得られなかった。また、LINEの利用頻度別における孤独感と友人関係の得点差について、一要因の分散分析を行った。いずれの場合も有意な差は得られなかった。LINE利用時の行動が友人関係に孤独感ほど影響を及ぼしていないのではないかという事を考察した。

【Key Word】 女子大学生、LINE利用時の行動、孤独感、友人関係

I. 問題

1. 近年の若者のコミュニケーション手段 について

現在、スマートフォンの普及により、若者のコミュニケーション手段としてSNSが

多く用いられている。総務省情報通信政策研究所（2018）によるスマートフォン利用率の調査において、生徒または学生である年齢が多い10代20代に注目すると、10代では85.6%、20代では96.8%と非常に高いこ

とが報告されている。また、ソーシャル・ネット・ワーキング・サービス(以下SNS)の利用率に注目すると、10代・20代ともに最も利用しているものがLINEであった。SNSの利用率は、10代で86.3%、20代では95.8%であった(総務省情報通信政策研究所, 2018)。これらのことから、学生を含む若者において、SNSは欠かせないものになってきていることがわかる。

「LINE」とは、主にスマートフォンでの手軽な操作により、無料でテキストチャットや通話が可能となるアプリケーションの一つである。2011年に提供が開始された。従来若者の間のコミュニケーションツールとして携帯電話のEメール機能が用いられてきた。Eメール機能とLINEの違いとして、LINEはやりとりの同期性が高く、既読機能を持つという点である。既読機能とは、送信したメッセージを相手を読むと「既読」という文字が表示される機能である。また、多種多様なキャラクターのイラストを用いて感情を表現する「スタンプ」も若い世代の中でLINEが急速に広まった要因として指摘されている(吉田, 2015)。

2. 孤独感について

孤独感は青年期の特徴的かつ代表的な生活感情である。この時期に直面する発達課題は「自分さがし」であることから、日常生活の様々な場面で「自分が一人であること」を感じる瞬間は少なくない(清水・清水・川邊, 2015)。

Peplau&Perlman (1979) は、孤独感について、「個人が現実を経験している社会的関係が、当人がもちたいと望んでいる関係と比べて、下まわったり、不満であると

認知されるときに生じる不快な感情」と定義している。つまり、青年を取り巻く様々な人間関係において、現実水準が理想水準に追いつかないことで孤独感が生起することを示したものである。小塩(2004)は、特に青年期において自分の自信や優越感といった自己の肯定感を何とか維持したいという自己愛傾向が高まる時期であると述べた。これに関して清水・清水・川邊(2015)は、理想水準は無意図的に高いレベルに設定され、一方、現実水準は実際よりも低く見積もられる可能性があるとした。また、落合(1982)は、孤独感を「自分(または人間)が孤独(ひとり)だと感じること」と述べている。青年期の孤独感については、心理的規定因によるものが多くみられたと報告している。

3. 友人関係について

落合・佐藤(1996)では、青年期における友達とのつきあい方について、中学生・高校生・大学生を対象に調査を行っている。その結果、青年期のはじめには浅く広くかかわるつきあい方がみられたが、年齢が増すにつれて深く狭くかかわるつきあい方になっていくことが指摘されていた。

また、青年期は、親や大人との結びつきが相対的に弱化していくことに対し、同年代の友人との関係性は強化していく。その中で自己存在の証明を補完しつつ、“自分らしさ”を模索していくのである。これは、青年期において重要な主題であり、この関係性のスムーズな移行が青年たちの精神健康に大きな意味を持つとされている(清水・清水・川邊, 2015)。

Ⅱ. 目的

本研究の目的は、女子大学生を対象とし、青年期と密接な関係にある孤独感及び、日々のコミュニケーションツールであるLINE利用時の行動が友人関係に及ぼす影響について調査することである。また、仮説は以下のとおりである。

仮説1. LINE利用時の行動が多いと友人関係に正の影響を及ぼす。

仮説2. 孤独感が高いほど友人関係に負の影響を及ぼす。

仮説3. LINE利用頻度が高いほど、孤独感が低い。

仮説4. LINE利用頻度が高い人ほど、友人関係が円滑である。

Ⅲ. 方法

1. 調査対象

関東圏内のX女子大学に在籍している1年～4年生（合計164名、平均年齢19.60歳、SD：0.85歳）。

2. 調査時期

2019年5月下旬

3. 調査内容

質問内容はフェイスシート、改訂UCLA孤独感尺度、LINE利用時の行動尺度、友人関係尺度の計4つである。調査に対する同意に関しては、質問紙に本研究の趣旨と同意について説明した文書を添付し、質問

表1 改訂UCLA孤独感尺度下位項目

私は、自分の周囲の人たちと調子よくいっている。*
私は、人とのつきあいが無い。
私には、頼りにできる人がだれもいない。
私は、ひとりぼっちではない。*
私は、親しい仲間たちのなかで欠くことのできない存在である。*
私は、自分の周囲の人たちと共通点が多い。*
私は、今、だれとも親しくしていない。
私の興味や考えは、私の周囲の人たちとはちがう。
私は、外出好きの人間である。*
私には、親密感のもてる人たちがいる。*
私は、無視されている。
私の社会的なつながりはうわべだけのものである。
私をよく知っている人はだれもいない。
私は、他の人たちから孤立している。
私は、望むときにはいつでも、人とつきあうことができる。*
私には、私を本当に理解してくれる人たちがいる。*
私は、たいへん引っ込み思案なのでみじめである。
私には、知人はいるが、私と同じ考えの人はいない。
私には、話しかけることのできる人たちがいる。*
私には、頼りにできる人たちがいる。*

*は逆転項目

紙の提出をもって研究への同意とした。いずれも無記名で行った。

1) フェイスシート

学年・年齢・性別・学部・LINE利用頻度の記入を求めた。LINE利用頻度に関しては、①四六時中、②通知に気づいたとき、③1日に1回ぐらい④放置している⑤まったく利用していない以上の5項目から回答を求めた。

2) 改訂UCLA孤独感尺度

Russel, Peplau, & Cutrona (1980)による改訂UCLA孤独感尺度の翻訳版(諸井, 1991)を用いた。計20項目で構成されている。質問項目を表1に示す。本尺度は、単次元尺度であることが報告されており、信頼性は $\alpha = .80$ 以上である。

3) LINE利用時の行動尺度

高橋・伊藤(2016)が、伊藤(2014)が実施したSNSでの対人行動やSNSのコミュニケーションの仕方に関する半構造化面接調査の結果をもとに作成したものである。TwitterとLINEで項目を対応づける形で46項目が作成された。その46項目に対して、因子分析を実施し、5個の因子構造を採用している。第1因子「一般的積極利用」、第2因子「自己アピール」、第3因子「敏感即応」、第4因子「スルースキル」、第5因子「表現法配慮」の5つの下位尺度から構成されている。本尺度における信頼性・妥当性はともに検討されていない。本研究ではLINE利用時の行動尺度のみを用いる。質問項目を表2に示す。

表2 LINE利用時の行動尺度下位項目

<p><第1因子：一般的積極利用></p> <ul style="list-style-type: none"> 写真や動画をを投稿する 共通の趣味や話題について話す 他人の意見に共感を示す TVや好きな芸能人について投稿する 自分の友人の名前を入れて投稿する 質問を投げかけるような投稿をする 真面目なツイートをおこなう 相手が弱っているときに「大丈夫？」等の投稿をする 時間帯関係なくやり取りをおこなう 直接会う予定を組む 自分の意見をはっきりとツイートする 個人情報が含まれた内容を投稿する 自ら積極的に話しかける くだらないやり取りをおこなう 話題性のある内容を投稿する 泣き顔の絵文字やスタンプを利用する <p><第2因子：自己アピール></p> <ul style="list-style-type: none"> 意味深なツイートを行う 自分の日常が充実していることをアピールする 忙しいということをアピールする 体調が悪いことをアピールする 暇であることをアピールする <p><第3因子：敏感即応></p> <ul style="list-style-type: none"> 早く返信しなければならぬ衝動に駆られる 既読がついたかどうかを常に確認する LINEの通知が多いとイライラする 悩み相談をする 返信を素早く行う 相手の意見が間違っただけであれな反論する <p><第4因子：スルースキル></p> <ul style="list-style-type: none"> 不快な投稿を見ても、何事もなかったように別の話題を投稿する 不快な投稿を見たら見て見ぬふりをする 批判や意見が分かれるような投稿をしない どのようなツイートがあっても気にしない <p><第5因子：表現法配慮></p> <ul style="list-style-type: none"> 連続投稿を避ける 長文にならないようにする いつもテンションが高いように心がけている 本音を投稿しない 言葉づかいや表現に注意しながら投稿する
--

表3 友人関係尺度下位項目

<p><第1因子：表面的—内面的関係></p> <p>友達に心を打ち明ける</p> <p>友達に悩みごとを相談する</p> <p>友達と真剣な議論をする</p> <p>友達とは、あたりさわりのない会話を中心だ</p> <p>友達関係は浅い付き合いにとどめる</p> <p><第2因子：群れ></p> <p>ウケるようなことをする</p> <p>友達に冗談を言って笑わせる</p> <p>仲間と一緒にいることが多い</p> <p>一人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする</p> <p>仲間から「つまらない人間」と思われないよう気をつける</p> <p><第3因子：気遣い></p> <p>友達の考えていることに気をつかう</p> <p>仲間関係の中で互いに傷つけないよう気をつかう</p> <p>仲間のためにならないことは決してしない</p> <p>自分を犠牲にしても友達につくす</p> <p>友達との約束は決して破らない</p>
--

4) 友人関係尺度

岡田（2010）による友人関係尺度を用いた。第1因子「表面的—内面的関係」、第2因子「群れ」、第3因子「気遣い」の3つの下位尺度なり、計15項目で構成されている。項目は表3に示す。信頼性は、第1因子 $\alpha = .84$ 、第2因子 $\alpha = .76$ 、第3因子 $\alpha = .57$ であった。妥当性に関しては検討されていない。

IV. 結果

1. LINE利用時の行動及び孤独感と友人関係の因果関係

独立変数をLINE利用時の行動尺度の下位尺度及び孤独感尺度、従属変数を友人関係尺度の下位尺度とし、重回帰分析を行っ

た。重回帰分析の結果は以下の通りである。

1) LINE利用時の行動尺度の下位尺度・孤独感尺度と「表面的—内面的関係」因子の重回帰分析の結果（表4）

決定係数は.249であり、0.1%水準で有意な値であった ($F(6, 137) = 7.555, p < .001$)。孤独感の標準偏回帰係数は-.360で0.1%水準で有意であった。それ以外は有意でなかった。パス図は図1に示した。

2) LINE利用時の行動尺度の下位尺度・孤独感尺度と「群れ」因子の重回帰分析の結果（表5）

決定係数は.341であり、0.1%水準で有意な値であった ($F(6, 136) = 11.715, p <$

表4 LINE利用時の行動及び孤独感と表面的-内面的関係の重回帰分析

独立変数	標準回帰係数β
一般的積極利用	.185
自己アピール	.005
敏感即応	.115
スルースキル	.128
表現法配慮	-.007
孤独感	-.360***
R^2	.249***

従属変数：表面的-内面関係

*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

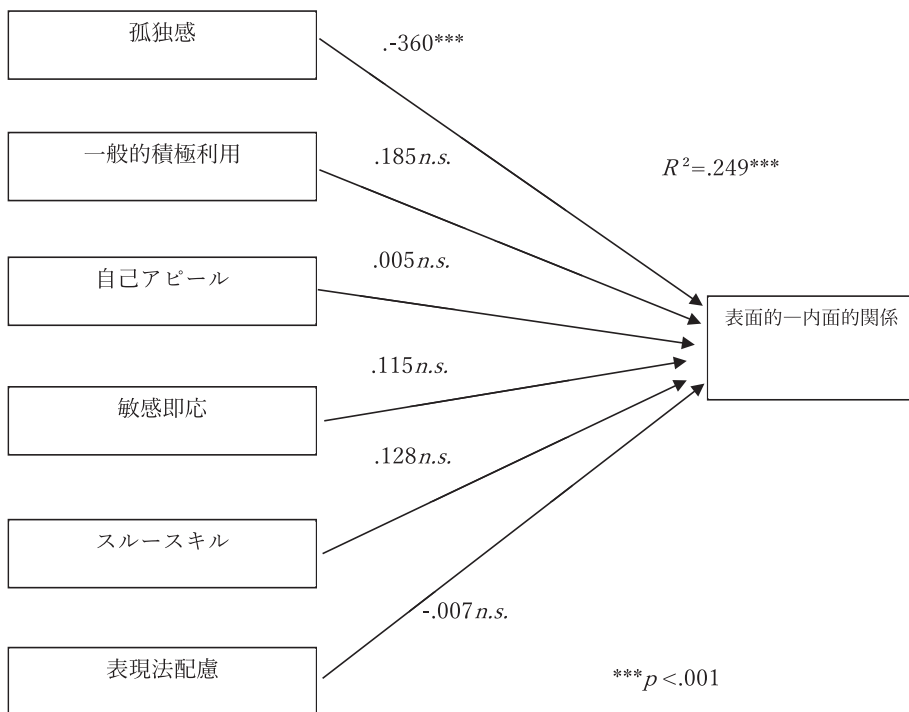


図1 LINE利用時の行動及び孤独感と表面的-内面的関係のパス図

.001)。孤独感の標準偏回帰係数は-.493で0.1%水準で有意であった。それ以外は有意でなかった。パス図は図2に示した。

3) LINE利用時の行動尺度の下位尺度・孤独感尺度と「気遣い」因子の重回帰分析の結果(表6)

決定係数は.204であり、0.1%水準で有意な値であった($F(6, 137) = 5.841, p < .001$)。孤独感の標準偏回帰係数-.364は、0.1%水準で有意であった。表現法配慮の標準偏回帰係数.223は1%水準で有意であった。それ以外は有意でなかった。パス図は図3に示した。

表5 LINE利用時の行動及び孤独感と群れの重回帰分析

独立変数	標準回帰係数 β
一般的積極利用	.112
自己アピール	.116
敏感即応	.092
スルースキル	.100
表現法配慮	.043
孤独感	-.493***
R^2	.341***

従属変数:群れ

*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

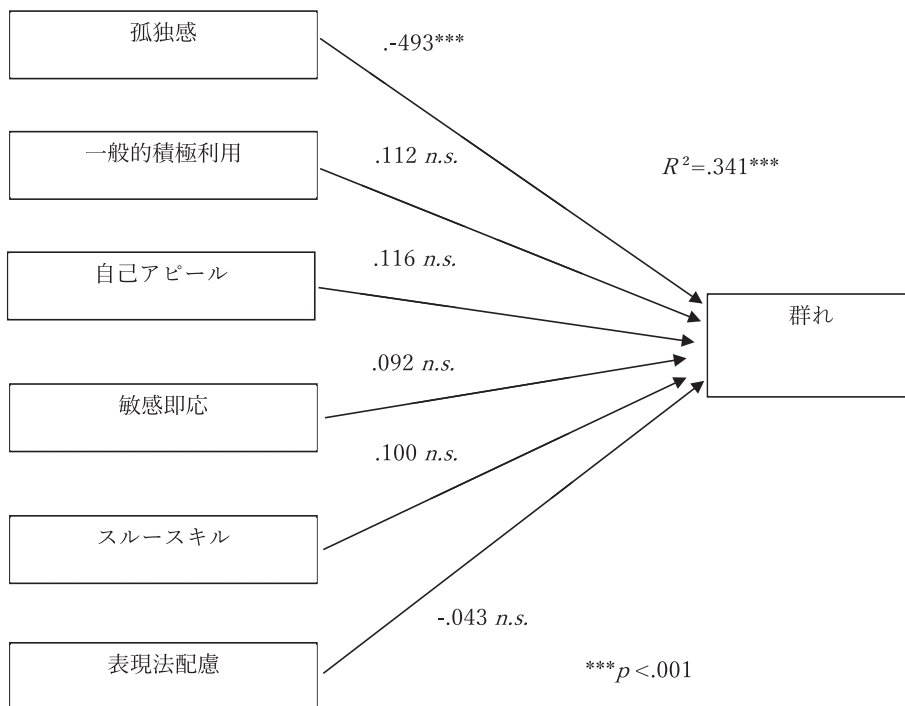


図2 LINE利用時の行動及び孤独感と群れのパス図

以上の結果から仮説1は支持されなかったが、仮説2は支持された。

比較するため、一要因の分散分析を行ったが、有意ではなかった。

3. 一要因の分散分析結果

1) LINEの利用頻度と孤独感について、
一要因の分散分析結果(表7)
LINEの利用頻度における孤独感平均を

2) LINEの利用頻度と友人関係の差の検討

LINEの利用頻度の違いによる友人関係の差を検討するため、独立変数をLINE利

表6 LINE利用時の行動及び孤独感と気遣いの重回帰分析

独立変数	標準回帰係数β
一般的積極利用	.043
自己アピール	-.115
敏感即応	-.001
スルースキル	.006
表現法配慮	.223**
孤独感	-.364***
R^2	.204***

従属変数：気遣い

*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

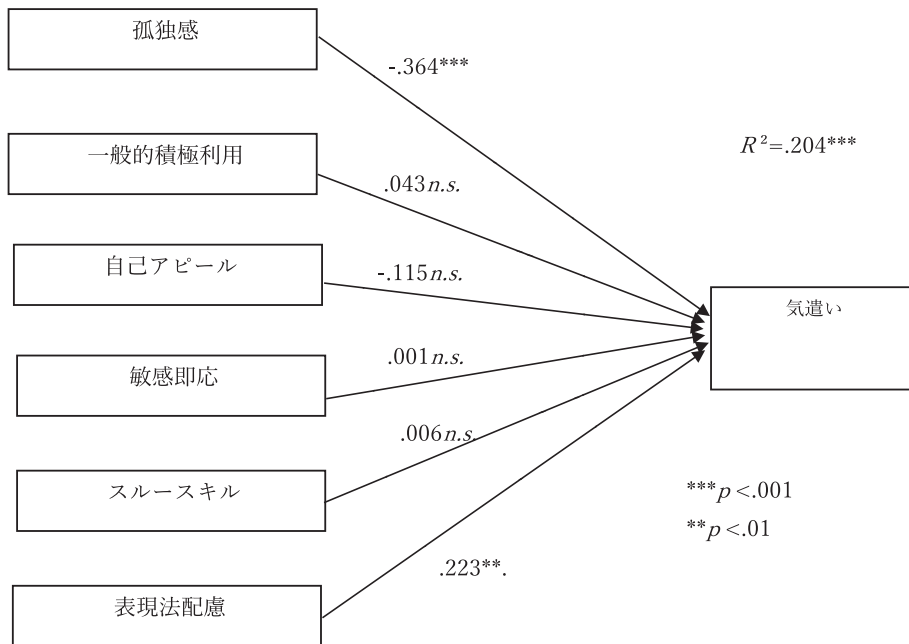


図3 LINE利用時の行動及び孤独感と気遣いのパス図

表7 LINE利用頻度の違いにおける孤独感の一要因の分散分析結果

	LINE利用頻度								F値	多重比較
	四六時中		通知に気づいたとき		1日1回ぐらい		放置			
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
孤独感	1.84	0.45	1.97	0.48	2.04	0.37	2.22	0.32	1.08	n.s.

*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

表8 LINE利用頻度の違いにおける友人関係の一要因の分散分析結果

	LINE利用頻度								F値	多重比較
	四六時中		通知に気づいたとき		1日1回ぐらい		放置			
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
表面-内面的関係	4.23	0.68	3.89	0.63	3.70	0.52	3.48	1.56	2.84*	n.s.
群れ	3.89	1.02	3.77	0.88	3.97	0.88	3.28	0.97	0.72	n.s.
気遣い	4.18	0.83	4.19	0.71	4.27	0.39	3.8	0.62	0.49	n.s.

*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

用頻度、友人関係尺度を従属変数とし、一要因の分散分析を行った結果を示す(表8)。

友人関係尺度のうち「表面的-内面的関係」下位尺度のみ、5%水準で有意に4つの条件群に差があることが明らかとなった($F(3, 155) = 2.835, p < .05$)。よって、多重比較を行ったが、有意な結果は得られなかった。「群れ」と「気遣い」において、有意差は見られなかった。

以上の結果より、仮説3と仮説4は支持されなかった。

V. 考察と今後の課題

本研究は、孤独感及びLINE利用時の行動が友人関係に及ぼす影響について検討したものである。これは、近年の若者のコミュニケーション手段がLINEになってきていることに加え、青年期の特徴的な感情の一つである孤独感が、友人関係に影響を及ぼすのではないかという問題意識に基づくものである。

重回帰分析の結果では、LINE利用時の行動が友人関係にほとんど有意な影響を及ぼしていなかった。唯一、「表現法配慮」が友人関係の「気遣い」に1%水準で有意な正のパス図が確認された。また、LINE利用頻度と孤独感、友人関係においても有意な差は認められなかった。有意でなかつ

たことを拡大解釈することは厳に、慎まなければならないことである。しかし、あえて言及するならば、LINE利用時の行動が友人関係に孤独感ほど影響を及ぼしていないのではないかと考える。酒井(2020)は、大学生のスマートフォン使用の実態について調査を行っている。そこで、大学生の友人との連絡手段について「LINE」が100%の結果であった。また、都築ら(2017)は、LINEやTwitterの利用目的についても調査していた。LINEの利用目的に関する記述で頻出した語について、「連絡」が最も多く、次いで「友達」「手段」であったと述べられていた(表9)。以上より、大学生において、LINEの利用目的は連絡が突出しているようである。あくまでLINEは連絡の手段であるため、深い友人関係への影響が少ないのではないかと考える。上述したように、重回帰分析において、「表現法配慮」が唯一有意なパス図が得られた。しかし、それを構成する質問項目を見てみると、「連続投稿を避ける」、「長文にならないようにする」、「本音を投稿しない」となっている。これらは、社会的儀礼上の配慮を意味するものであり、深い友人関係に必須となる行動とは異なると考えられる。この点からも、あくまでLINEは連絡手段であるため、深い友人関係への影響が少ないのではないかと考える。

本研究における限界点を以下に述べる。調査対象者は女子大生のみであるため、LINE利用の行動が友人関係に及ぼす影響については男子学生を含め、さらに調査していく必要があるだろう。

表9 都築ら (2017)

抽出語	出現回数
連絡	132
友達	71
手段	48
コミュニケーション	22
会話	20
家族	15
情報	12
取る	10

また、中学生や高校生においてLINEの利用時の行動と友人関係の関連について検討していく必要があると考える。吉田(2015)では、LINEの機能や特徴が若い世代のコミュニケーション上の問題として大きく取り上げられるようになったと述べられている。LINEではメッセージを読むと既読という文字が表示される機能がある。そのため、メッセージを読んだにもかかわらず返信をしなかったことを理由に嫌がらせや仲間はずれが始まり、いじめにも発展しうることが挙げられていた。このことから大学生よりもさらに若い世代にも目を向け、LINEと友人関係の関係性について検討していく必要性があるのではないかと考える。

また、「LINE利用時の行動に関する項目尺度」に関して、高橋・伊藤(2016)は信頼性・妥当性を検討していない。本研究では、その目的に則して、その尺度をそのま

ま使用している。しかしながら、信頼性・妥当性の検討は重要である。

これらの検討は、全て今後の課題である。

VI. 引用文献・参考文献

- 諸井克英 (1991). 改訂UCLA孤独感尺度の次元性の検討 静岡大学文学部人文論集42, 23-51.
- 岡田努 (2010) 青年期の友人関係と自己—現代性人の友人認知と自己の発達—世界思想社
- 小塩真司 (2004) 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- 落合良行 (1982) 孤独感の内包的構造に関する仮説 教育心理学研究30(3), 233-238
- 落合良行・佐藤有耕 (1996) 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究44(1), 55-65
- Peplau, L.A. & Perlman, D.(1979) Blueprint for a social psychological theory of loneliness. In M. Cook & G. Wilson (Eds.) *Love and attraction*. Oxford, England: Pergamon Press.
- Russel, D., Peplau, L.A., & Cutrona, C.E. (1980) The revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 472-480.
- 酒井佳世 (2020) 大学生のスマホの関わりが大学生活に与える影響 久留米大学コンピュータジャーナル(34), 26-32
- 清水健司・清水寿代・川邊浩史 (2015) 孤独感および孤独に対する捉え方が友人

関係に及ぼす影響, 信州大学人文科学
論集 = Shinshu studies in humanities
(2), 107-117

総務省情報通信政策研究所 (2018) 平成29
年情報通信メディアの利用時間と情報
に関する調査報告書〈概要〉
[http://www.soumu.go.jp/main_](http://www.soumu.go.jp/main_content/000564529.pdf)
[content/000564529.pdf](http://www.soumu.go.jp/main_content/000564529.pdf)

高橋尚也・伊藤綾花 (2016) SNS利用にお
ける青年の対人関係特性—Twitterと
LINE利用時の行動に注目した検討—
立正大学心理学研究所紀要14, 39-50
都築学・宮崎伸一・村井剛・早川みどり・
永井暁行・飯村周平 (2017). 大学生

におけるLINEやTwitterの利用目的と
その心理についての研究中央大学保健
体育研究所紀要 = Bulletin of the Insti-
tute of Health and Sports Science,
Chuo University(35), 3-32

吉田明子 (2015). スマートフォン
(LINE) がもたらす新しいいじめ 児
童心理69(1), 96-101

VIII. 謝辞

本研究に調査対象者として参加し貴重な
意見をいただいた学生の方々に、この場を
借りまして厚く御礼申し上げます。